TOP MUSEUM

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
TEL 03-3280-0099　FAX 03-3280-0033
www.topmuseum.jp

TOP Collection

アジェのインスピレーション
ひきつがれる精神

TOP Collection　Eugène Atget: The Eternal Inspiration

2017 年 12 月 2 日（土）～2018 年 1 月 28 日（日）

ウジェーヌ・アジェ《日食の間》
1912 年
ゼラチン・シルバー・プリント

東京都写真美術館では開館当初からウジェーヌ・アジェ作品を収集し、現在 150 点をコレクションしています。これまで様々な切り口でアジェの作品を紹介してきましたが、本展では、アジェがこの世に遺した 20 世紀前後に捉えたパリの光景の写真が、なぜ現在も多くの写真家たちに影響を与え、魅了してやまないかを考察します。20 世紀から現在に至るまで長きに渡って受け継がれてきたアジェのスピリットとはいったい何なのでしょうか。当館の約 3 万 4000 点を誇る多彩なコレクションより、アジェ自身の作品と 20 世紀から現代に至るまでの作家たちの作品、そして写真集や資料等によって検証します。

出品作家

ウジェーヌ・アジェ、マン・レイ、シャルル･マルヴィル、アルフレッド・スティーグリッツ、ベレニス・アボット、ウォーカー・エヴァンズ、リー・フリードランダー、ジャン=ルイ・アンリ・ル・セック、荒木経惟、森山大道、深瀬昌久、清野賀子（12 作家）

出品点数

約 155 点（予定）

写真の歴史に燦然と輝く、ウジェーヌ・アジェの功績

本展覧会はフランスの写真家、ウジェーヌ・アジェ(1857-1927)が後世の写真表現にどのような影響を与えたかについて考えます。当館所蔵の作品と写真集などの資料によって、アジェ自身の作品とアジェ以降の写真家たちの際立った作品を中心に、その輪郭を浮び上がらせようとするものです。

ウジェーヌ・アジェは19世紀末から20世紀初頭にかけて、パリとその周辺を捉えた写真家です。1898年、41歳の時から30年間にわたって8,000枚以上の写真を撮影し、歴史的建造物や古い街並み、店先や室内、看板、公園、路上で働く人々など、近代化が進み、消えゆく運命にあった「古きパリ」を体系的に記録し、図書館や美術館、博物館などの公的機関や画家、建築家等のアーティストたちに販売しました。その顧客にはレオナール・フジタもいます。

晩年から没後に評価されたアジェ

アジェは孤高の写真家と称されることも多く、ひとり黙々と撮影に取り組みましたが、亡くなる2年前頃よりにわかに注目されはじめます。偶然にも、同じ通りにスタジオを持っていたマン・レイがアジェの写真からシュルレアリストと共通するものを感じ取り、『シュルレアリスム革命』誌に取り上げたのです。この頃から、アジェの作家性にスポットライトが当たりはじめました。

マン・レイ 《醒めて見る夢の会》 1924年
ゼラチン・シルバー・プリント

さらに、当時、マン・レイの助手をしていたベレニス・アボットによって、アジェの存在は世界に波及していきます。アジェの死後、散逸の危機にあったプリントやガラス乾板を、もうひとりの貢献者であるニューヨークのギャラリスト、ジュリアン・レヴィの助けを借りて買い取り、アメリカで広めていったのです。その後、写真史家や美術館のキュレーターたちによって研究が進められ、アジェは近代写真の先駆者として位置づけられていきます。

多くのアーティストに影響を与えたアジェ その謎はいまだ多い

しかしながら、アジェはいまだに謎めいたところのある写真家です。ニューヨーク近代美術館写真部門のディレクターだったジョン・シャーカフスキーは「ウジェーヌ・アジェ[･･･]、その人物について、我われには、わずかに信頼できる一握りの事実があるだけだ。それらはおおよそ不透明であいまいなもので、研究者たちは、そのことをきびしく穿鑿(せんさく)してきたが、そのほとんどは分からずじまいであった」(ジョン・シャーカフスキー「序文」『ウジェーヌ・アジェ写真集』[原信田実訳、岩波書店、2004]と、かつて述べているように、生前のアジェ自身のコメントがあまり残されていないこともあり、彼の作品について多くの人たちが様々な想像を巡らせ、その真実に迫ろうとしてきました。

アジェに憧憬を抱き、手本としてきた写真家たちは後を絶ちませんが、彼らがアジェの写真に見出したものはいったいなんだったのか。本展は、アジェの同時代の写真表現と、アジェの先達となる写真家の作品も併せて展示し、紐解こうとするものです。

ウジェーヌ・アジェ　略歴

1857 年、フランス南西部リブルヌに生まれる。幼い頃に両親を亡くして孤児となる。
1879 年、パリ国立演劇学校に入学するが、翌年、兵役のため中退。
1887 年頃にフランス北部ソンムに移り住む。写真を始めたのはこの頃と推測される。
1890 年初頭、パリに戻ったアジェは、アパートのドアに「芸術家のための資料」という看板を掲げて写真を売り始めた。その中で、19 世紀に世界の首都として繁栄を極めたパリの古き良き部分が、次第に失われてゆくのを目の当たりにし、1890 年の終わり頃から写真によるパリのコレクションを始める。
1925 年、マン･レイとそのアシスタントであったベレニス･アボット（1898-1991）と出会う。
1926 年、『シュルレアリスム革命』誌の 7 号と 8 号に、アジェの写真が掲載される。
1927 年没。
1928 年、アボットが散逸を恐れ 1787 枚の原版と 1 万枚のプリントを、ジュリアン・レヴィのサポートを受けて購入。その後、ふたりはアジェの紹介に努めた。
1964 年、アボットが写真集『The World of Atget』（Horizon Press Publishers）を出版。
1968 年、ニューヨーク近代美術館が、アボット＝レヴィ・コレクションを購入。
1981-85 年、ニューヨーク近代美術館が、4 回シリーズで回顧展を開催。

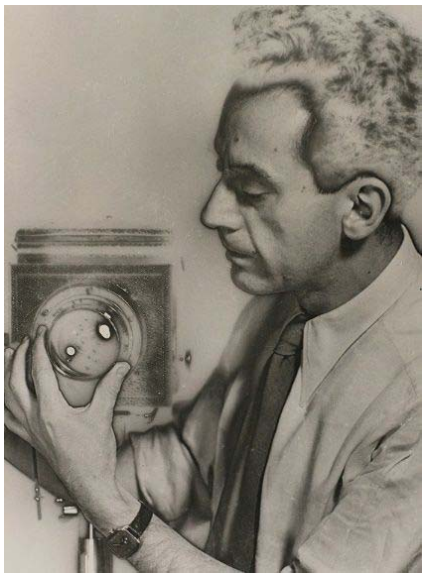
＜左上＞ウジェーヌ・アジェ《ショワジー館、バルベット通り 8 番地》 1901 年　鶏卵紙　＜右上＞ウジェーヌ・アジェ 《トリニ館、ケ・ダンジュ通り 11 番地》 1902 年　鶏卵紙　＜左下＞ウジェーヌ・アジェ 《(木)》 1910-20 年　油彩／キャンバス（厚紙に貼付）　＜右下＞ウジェーヌ・アジェ《フルーリー街 76 番地、シャペル大通り》1921 年　ゼラチン塩化銀紙（P.O.P）

アジェを評価した４人のキー・パーソン

アジェの才能を見いだした
マン・レイ

シュルレアリスムの鬼才、マン・レイ（1890-1976）。パリのモンパルナスにスタジオを構え、偶然にもアジェのスタジオのあるアパルトマンと同じストリートだった。1925 年にアジェのスタジオを訪れ、40 枚ほど写真を購入した。

彼がアジェと出会った頃は、カメラの技術革新や印刷技術の向上が著しく、新たなフォト・ジャーナリズムの展開やモダニズム的な考え方が台頭していった。そうした時代の変革と表現におけるムーブメントの中、マン・レイは、アジェの写真によるパリのコレクションにいち早く作家性を見いだす。マン・レイが購入した写真群は、まもなく、シュルレアリスト仲間や当時、マン・レイのアシスタントをしていたベレニス・アボットにも広がっていく。



マン・レイ　《セルフ・ポートレイト》
1932 年　ゼラチン・シルバー・プリント

アジェに傾倒　作品の購入・管理・出版に力を尽くした
ベレニス・アボット

ベレニス・アボット（1898-1991）は、マン・レイのアトリエで目にしたアジェの写真に魅了され、少ない収入の中から作品を購入するようになる。アジェの写真はシュルレアリストの機関紙『シュルレアリスム革命』の第 7 号に 3 枚、第 8 号に 1 枚の写真が掲載された。1927 年のアジェの死後、アボットは散逸の危機にあった作品を購入・管理し、出版やプリント制作に尽力するなど、自身の作品制作と同じく、アジェの作品とかかわっていく。

1964 年にアボット編集・執筆による写真集『The World of Atget』（ホライズン・プレス）を出版。

アボットは、アジェが行った都市の記録をニューヨークで再現したいと考え、1935 年にプロジェクトを開始、1939 年に『変わりゆくニューヨーク』（Hazan）を出版した。

ベレニス・アボット　《ウォーター・フロント》〈変わりゆくニューヨーク〉より
1938 年　ゼラチン・シルバー・プリント

アジェをいち早くアメリカで紹介した写真ギャラリスト
ジュリアン・レヴィ

『シュルレアリスム革命』誌でアジェの写真を見て以来、信望者のごとく虜となったジュリアン・レヴィ（1910―1980）は、アジェ本人から多くの写真を購入した。アジェと出会った頃のレヴィは、ハーバード大学を中退して渡仏、パリでシュルレアリストたちと交流していた。やがてニューヨークでギャラリストになることを決意。世界恐慌の余波はあったものの、1929 年にニューヨーク近代美術館（MoMA）がオープンするなど、ニューヨークは新しいものが生まれる機運があった。レヴィは帰国後すぐに写真プリント専門のギャラリーに勤務し、そこでアジェの作品をはじめて紹介する。1931 年には自身のジュリアン・レヴィ・ギャラリーをオープンし、写真をファインアートとして扱うギャラリストのパイオニアとなった。

アボットがパリから持ち帰り、自身も共同出資したアジェ作品一式を MoMA に販売しようと試みたが、1930 年代はまだ写真が絵画と同様に美術館のコレクションになるという価値観が育っていなかった。その後、同作品は 1969 年に MoMA が購入する。

アジェを近代写真の始点と位置づけ“巨匠”と知らしめた
MoMA 写真部門ディレクター
ジョン・シャーカフスキー

ジョン・シャーカフスキー（1925-2007）は、1962 年、当時の MoMA（ニューヨーク近代美術館）の写真部門ディレクターであった写真家エドワード・スタイケンに、後任として引き抜かれた。

シャーカフスキーは、ヴァナキュラー（vernacular）と呼ばれる、地域に特有なものや土地の日常的なものに感心を寄せる写真家、ありふれた風景を昇華させるような写真家に惹かれた。そして、アジェを近代写真の始点と位置づけ、ウォーカー・エヴァンズや、ゲイリー・ウィノグランドという新しく出てきたアメリカの写真家たちとリンクさせ、写真史の大きな流れを創りだした。1969 年、ゲイリー・ウィノグランド、リー・フリードランダー、ダイアン・アーバスを取り上げた「ニュー・ドキュメンツ」展はその象徴であった。

そして、シャーカフスキー率いる MoMA の写真部門が 1981 から 1985 年に開催したアジェの 4 つの展覧会「The Work of Atget」と、美しくまとめられた 4 分冊の展覧会カタログによって、アジェは巨匠と認識される作家となった。アジェ作品は金銭的にも高く評価され、その地位を不動のものとした。

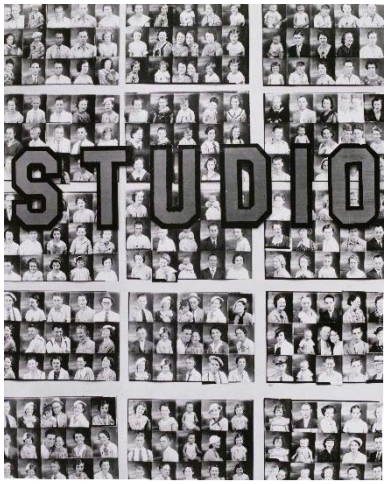
「The Work of Atget」Vol.I-Vol.IV （参考図版）

受け継がれてきた、アジェのスピリット。

当館の多彩なコレクションから
20 世紀から現代まで、さまざまな作家を紹介します。

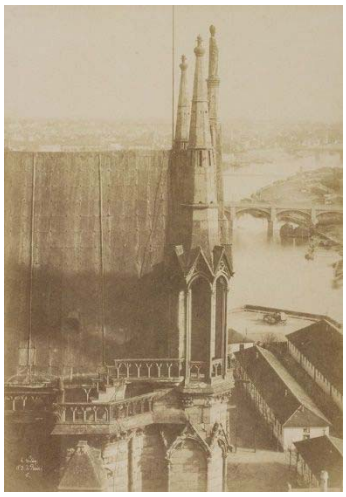
シャルル・マルヴィル《パリ市庁舎、パリコミューンの前》　1871 年　鶏卵紙

アルフレッド・スティーグリッツ《三等船室》
1907 年　フォト・グラヴュア



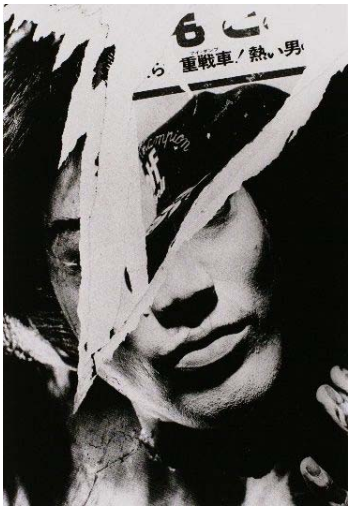
ウォーカー・エヴァンズ《写真家のウィンドウディスプレイ、バーミンガム洲、アラバマ》
1936 年　ゼラチン・シルバー・プリント

リー・フリードランダー《キャニオン・ド・シェリー、アリゾナ》　1983 年　ゼラチン・シルバー・プリント（参考図版）



ジャン=ルイ・アンリ・ル・セック《パリ、ノートルダム寺院》1851 年
単塩紙

荒木経惟　〈写真論〉より　1988-89 年
ゼラチン・シルバー・プリント



森山大道　《ポスター（中野）》〈東京〉より
1968-80 年　ゼラチン・シルバー・プリント

深瀬昌久　《襟裳岬》〈鴉〉より　1976 年
ゼラチン・シルバー・プリント

清野賀子　〈Untitled〉より　1999 年
館山、千葉　発色現像方式印画

> *確かにぼくは、ウィリアム・クラインやアンディ・ウォーホルの作品にも強く衝撃を受けたけど、それらはいずれも出会い頭のインパクト、つまりヤラレタ！ってものですね。でもアジェの写真はなんかこう、いつの間にかひっそりと、ぼくの身辺に寄りそってくる。（中略）アジェの残した膨大な量の写真全体を見渡せば、その構図のしたたかさや街をとらえる視線のしぶとさに脱帽したくなりますよ。つまりアジェと写真との邂逅は決定的だったと思います。アジェの写真は（中略）、ぼくにとっては、限りなく蠱惑的な存在です。*

（森山大道『東京都写真美術館ニュース 20 号』1998 年より抜粋）

> *いまアッジェとエバンスとどっちが好きか、イイかと、二人の写真集をさがしたのだがエバンスのしか見つからない。たしかアッジェは三冊あったはずだ。誰かに貸したままなのかな。（中略）んでよー、しかたなくエバンスだけを見る。うーん。ちょっとものたりない。＜情交＞してない。＜私情＞がない。やっぱ＜私情＞がなくちゃね。やっぱりアッジェだね。アッジェさん、エバンスなんかと比べちゃってごめんなさい。格が違うもんね。*

（荒木経惟『東京は、秋』2016 年、 P187『アサヒカメラ』1983 年 7 月増刊号の引用より抜粋）

展覧会図録

『アジェのインスピレーション　ひきつがれる精神』
東京都写真美術館発行　 価格未定
テキスト　鈴木佳子（当館担当学芸員）　 テキスト再録　横江文憲（写真評論家）

関連イベント

関連トーク「ウジェーヌ・アジェの写真を紐解く」

出　演　横江文憲（写真評論家）
日　時　12月8日(金) 18:00～19:30
会　場　東京都写真美術館　1 階スタジオ
定　員　50 名　 ※当日 10 時より 1 階総合受付にて整理券を配布します。

関連トーク「ウジェーヌ・アジェの写真集をめぐって」

出　演　金子隆一（写真史家）
日　時　2018年1月5日(金) 18:00～19:30
会　場　東京都写真美術館　1 階スタジオ
定　員　50 名　 ※当日 10 時より 1 階総合受付にて整理券を配布します。

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第1、第3金曜日14:00より、担当学芸員による展示解説をおこないます。展覧会チケット（当日消印）をご持参の上、3階展示室入口にお集まりください。

＊事業はやむを得ない事情で変更することがございます

開催概要

展覧会名　TOP Collection
アジェのインスピレーション　ひきつがれる精神
TOP Collection　Eugène Atget: The Eternal Inspiration

主　　催　東京都 東京都写真美術館

会　　場　東京都写真美術館 3 階展示室
東京都目黒区三田 1-13-3　恵比寿ガーデンプレイス内
Tel　03-3280-0099　URL　http://topmuseum.jp

開館時間　10:00〜18:00（木・金は 20:00 まで)、ただし 2018 年 1 月 2 日･3 日は 11:00〜18:00
入館は閉館 30 分前まで

休 館 日　毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は開館、翌平日が休館)、2017 年 12 月 29 日（金）
〜2018 年 1 月 1 日（月・祝）

観 覧 料　一般 600 (480)円／学生 500(400)円／中高生・65 歳以上 400(320)円
※（　）は20名以上の団体料金 ※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料　※第3水曜日は65歳以上無料　※1月2日（火）は無料

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版（参考図版を除く）をデータにてご用意しております。
掲載をご希望の際は、下記広報担当までご連絡ください。
なお、掲載点数が 1 点の場合は、展覧会メインイメージとして、本リリース 1 ページ目の
ウジェーヌ・アジェ《日食の間》　1912 年　ゼラチン・シルバー・プリント　をご提供させていただきます。
このリリースに掲載されている作品は、すべて東京都写真美術館蔵です。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
図版のトリミングはできません。

（ご注意）リー・フリードランダー　《キャニオン・ド・シェリー、アリゾナ》 1983 年　は、
参考図版のためメディア掲載はできません。あらかじめご了承ください。

東京都写真美術館
〒153-0062　東京都目黒区三田 1-13-3　恵比寿ガーデンプレイス内
Tokyo Photographic Art Museum
1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan
Tel　03-3280-0034　Fax 03-3280-0033　http://topmuseum.jp
展覧会担当　鈴木佳子 y.suzuki@topmuseum.jp
石田哲朗 t.ishida@topmuseum.jp
広 報 担 当　久代明子　平澤綾乃　前原貴子 press-info@topmuseum.jp